（その 8）

明治生まれのパイオニア　原　　孝一さん　のこと

いまは昔、と言っても約70年前、大正8年のことである。現在、「田中野田バス停」の南の原商店のある場所に精米所が作られた。当時としては、最も近代的な内燃機関と言える。「ガスエンジン」を動力とした精米所である。当時、数え年25歳の原　孝一さん（原　好幸さんの父君）の創業になるものである。そしてそれは、私の幼児の頃である。そのエンジンは、ガス発生装置を動かすことから始めねばならないので、エンジンの始動にも時間がかかるばかりでなく、回転も今のように早くなかった。それでも、精米所の稼動する日には、私は、精米所をおそるおそる覗いてリズミカルに動くエンジンに終日見ほれていたものである。（上掲の写真は、開設当時の精米所の写真である。後述）

この精米所がなかった以前は、各家庭で、足踏みのカラ臼で米をついていたのである。この動力精米所は、田中野田のみでなく、今地区でも機械化加工場の第1号であったろう。

また、ここでは精米ばかりでなく、い草の肥料として使われていた、大豆粕玉（その頃、満州―現在の中国・東北地方―から輸入していた）の粉砕の機械も備えつけられていて、周辺農家は大変便宜を受けていたのである。

この精米所も、昭和初期、「電動機（モーター）と還流摩擦式精米機」の普及するに及んで休止された。（現在では、この精米機も小型化されて農家の各家庭で使われるようになっ

たが。）

　それにしても、この地区で、米麦とい草の栽培しか考えていなかった時代に、外国製の高価なエンジンを導入し、精米工場を始めた、青年実業家原　孝一さんの「時代を先取りしよう」と言うパイオニア精神に感銘を受けるのである。

　孝一さんの、この事業を始めようとした動機も、まして、採算や経営状況は知る由もない。孝一さんにしてみれば、機械化・近代化が徐々に進みつつある時代の動きをとらえ、地域のために役立とうとして、いち早くこの事業を始められたのであろうと思われる。採算のことよりも、新しい時代を切り開いていこうとする孝一さんの開拓精神が、今の私にも伝わってくるのである。

　「つねに前を向いて歩くんだぞ」と言われているような氣がする。皆なの後についていって、間違いのない平凡な暮らしに満足するのでなく、リスクを恐れず、新しい時代に向けて自らをためそうとする、明治人のチャレンジ精神に改めて敬意を表したい。

　上掲の写真（原　好幸さん提供）は、大正10年（1921年）に撮られた原　精米所である。私にとってはとてもなつかしい。そして向かって左側の人物が、当時の美少年、原　孝一さんである。

平成元年4月号　第10号
（　中　尾　　佐之吉　）